

広島から世界へ

師勝中学校 三年 小田 早耶香

焼けこげた学生服、黒こげになった弁当箱、大火傷をして治療を受けている人の写真、白壁に残った黒い雨の跡、八時十五分で止まった時計……。初めての実物を見た私は、とても大きなショックを受けました。今まで本やテレビでしか見たことがなく、どこか違う世界の話のように思っていました。もちろん、頭の中では分かっているつもりでした。でも本当に、このきれいな広島町が、六十六年前はあんな悲惨な状態だったなんて……。

一九四五年八月六日午前八時十五分、長さ約三メートルの一つの原爆が、広島に落とされました。爆心地から二キロメートルにおよぶ市街地の建物が跡形もなく壊され、焼きつくされました。たくさんの人々の命と、それまでの生活を奪いました。一瞬にして失ったものの大きさは、計り知れません。どれだけの恐怖の中で、どのような思いで亡くなっていかれたのでしょうか。生きのびた人達も、たくさん死を目の前に、どれほどの怒りや悲しみに耐えてきたのでしょうか。

私達は、平和記念式典に参加させていただきました。午前八時十五分、鳴り響く平和の鐘を合図に、黙とうを捧げました。その間、いろいろなことを考えました。原爆投下直後の広島の様子、人々の思い。ふと、「もし、今原爆が落ちたらどうなるのだろう。」と思いました。しかし、とても恐ろしく、想像することとは、できませんでした。

今年、三月十一日に東北地方を中心とする大きな地震、東日本大震災が発生しました。大きな揺れ、大きな津波が東北地方を襲い、たくさんの死者と行方不明者を出しました。破壊された街。家族や友人を失った人々。福島第一原発による放射能の被害。原爆が落とされたときの広島と、どこか重なります。でも、とても大きな違いがあります。それは、自然がもたらしたものなのか、人間がやったことなのか、ということ。残念ながら、震災を起こさないようにすることはできません。しかし、人間が始める戦争は、人間の力で起こさないうようにできるはず。戦争を起こすのも人間。攻撃し合うのも人間。原爆を落とすのも人間。苦しむのも人間。それなのに、なぜ人間は、戦争をするのでしょうか。人間同士で苦しめ合って何があるのでしょうか。今も世界の各地で、戦争や紛争が絶えません。何のために戦い続けるのでしょうか。

今も、核兵器を持っている国が、たくさんあります。国を守るために持っているだけかもしれません。しかし、核兵器がないと守れない世界ではないのでしょうか。このことを、世界中全員が考えなければなりません。私は、核兵器のない世界を望んでいます。原爆の犠牲者の方々が安らかに眠れるように。そして、世界恒久平和を祈って。

広島へ行つて

西春中学校 三年 長谷川 貴大

八月五日、六日に僕は平和の使者として広島へ行きました。

八月五日は、厳島神社、そして、平和記念資料館を訪れました。

平和記念資料館では、八時十五分で時を刻まなくなった時計や被爆者の髪の毛や爪などが展示されていました。展示されているもの全てから当時の悲しさが伝わってきて、心が痛くなりました。改めて戦争の怖さと平和の大切さを実感しました。

八月六日には、平和記念式典に出席しました。世界各国から多くの人々が式典に参加されていて、世界中で平和ということに関心をもち、行動しているのだと知りました。僕達も、これから誠実に平和を希求していかねければならないと思いました。

八時十五分には黙とうを捧げました。六十六年前、同じ時間に原爆が投下され、多く尊い命が失われてしまいました。多くの命を奪った原爆は、今もアメリカやロシアを初めとする世界各国で保有しています。核軍縮が行われているとはいえ、核を廃絶することは出来ておらず、再び同じ過ちが繰り返されてしまう可能性があります。こども代表による平和への誓いでこのような言葉がありました。「戦争を始めるのは人間です。人間の力で起こさないようにできるはずです。」

この言葉を聞いたとき核兵器も同じなのだと思います。なぜなら、核兵器を創り出したのは人間だからです。ならば人間の力で廃絶もできるはずです。

しかし、実現することは簡単ではありません。国境をこえて世界中の人々が平和に向けて力を合わせることで、初めて核兵器を廃絶することができるでしょう。

平和記念式典は、このようなたくさんの方の大切なことを学ぶとても貴重な場でした。

式典が終わってから献花をしました。献花台にはたくさんの方がおり、その花の数だけの悲しみがあると思うと、戦争なんてしてはならないと痛感させられました。

平和の使者として広島へ行つた二日間で僕が考えたことは、世界の誰もが怯えることなく生活できる平和な世界を築き上げることです。今、広島は町も人も活気にあふれています。もう二度と焼け野原になることがないように、今を生きる僕達が実行していかなければなりません。

どんなに時がたつても、六十六年前に広島に原爆が投下された事実が変わることはありません。事実をしっかり心で刻み、未来を生きていく僕達がしっかりと戦争の悲惨さと、平和の大切さを受け継いでいきたいと思います。

折れなかった千羽鶴

白木中学校 三年 河瀬 美月

三月十一日に起こった東北沖地震で福島原発が爆発した。その爆発は、大量の放射能をまき散らし、たくさんの人々と動物の日常を奪っていった。今、日本では原発を廃止しようとする声の高まりに伴い、五十四基あった原発の半数近くが停止しているそうだ。「あの事故が起きたのは、設計や強度にも問題があった。もっとお金と時間をかければ、危険といえど上手く扱えるのではないか。」私はそんなことを考えながら、八月五・六日に平和の使者として、広島を訪れた。

五日に見学をした平和記念資料館。そこには、原爆の悲惨さを物語る多過ぎる程の展示物があった。血の跡の残るパンツ、八時十五分で止まった時計、真っ黒になったお弁当箱、まがった三輪車……。持ち主の性別、年齢、行動は全てバラバラ。ただ広島市内にいたというだけと同じ。たった一つの原爆で何もかもが破壊され、あの地獄を味わったのだ。「悔しい」、「悲しい」、「助けて」、展示物の一つ一つが私に訴えてくるようで、思わず足がすくみ、目をそらしたくなった。

それでも、資料館内を見て回っていると、たくさんの小さな折り紙が目にとまった。それらを折ったのは貞子さんという女の子だった。原爆で傷を負わなかったものの、後に病気にかかり、治るようになると思いをこめて、千羽鶴を折り続けたそうだ。貞さんはどんな思いでツルを折ったのだろう。千羽折るという一つの希望を目指して決してあきらめなかった貞子さん。でも、心のどこかでは、千羽に到達しないかも知れない恐怖と、無傷で希望を持ったところを病気にし絶望させた原爆への恨みと戦っていたと思う。丁寧に折られたツルたちからは、貞さんの懸命さと悲しみが伝わってきた。だが、貞さんが良くなることはなく、千羽鶴を折っている途中で亡くなってしまった。

今回の福島原発の事故で、今のところ発病した人はいない。でも、あのととき福島原発の近くにいた人の中には、いつ発病するか分からない不安を抱いている人は何人もいるだろう。もう二度と貞子さんのような悲しみをくり返してはいけない。原発をいくら安全に使用しようとしても、危険なことに変わりはない。私の考えは一人の女の子によって、二度とあのような悲惨な事故が起きないように心がければ安全に使えるだろうという考えから、事故が起こる可能性がある限り、恐怖は付いてくる、原発は廃止すべきだという考えへ見事にひっくり返ったのだ。

地球上には、まだまだたくさんの原発や核兵器がある。しかし、少しずつ減ってきていることも確かだ。地球上から全ての核が無くなるまで、私は折り続けよう。貞さんの絶望と希望を胸に。

広島で学んだこと

訓原中学校 三年 小塚 耕一郎

僕たちは、八月五日から六日まで「平和の使者」として広島に行きました。

初日に宮島の厳島神社に行くまでは、ただの旅行でしかありませんでした。

しかし、広島平和記念公園へ行った途端、そんな旅行なんていう安易な気持ちではなくまりました。教科書の中でしか見たことがなかった「原爆ドーム」を目の当たりにしたのです。教科書の写真という枠では伝わらない迫力がそこにはありました。これを現実と思いたくないほど、六十六年前の悲しい出来事が「原爆ドーム」には、はっきりと残されていました。そして、その後には広島平和記念資料館に行きました。そこでは、原爆の苦しさや悲しみが、一つ一つの物や写真からすぐく伝わってきました。歩いて見ていると、自然に足が止まってしまふものばかりで、僕の想像をはるかに超えるほど強烈でした。特に、やけどやけがに苦しんでいる人が載っている写真を見ると、その目はなにか僕に訴えるように、こちらを見ていました。その目を見ていると何故か悲しい気持ちになって、涙が出そうになりました。心に痛みを感じながら歩いていると、さらに僕の心を苦しめるものがありました。それは、胸のポケットに時間割の表が入っている、ポロポロの学生服でした。今の自分の姿に似ていて、その学生服の前で僕は呆然としてしまいました。本当に、いつもと変わらない日に原爆が落とされたんだなと思ひ、心に大きな穴が空いたような感じでした。そして、この広島記念資料館へ行ったことは、日本人として一生忘れてはいけないことであり、ここで見たものは、いつまでも僕の心の中に残ると思います。

二日目は、平和記念式典に参列するために再び広島平和記念公園に行きました。一日目とは人の数が全く違い、横へ半歩動けば人と当たってしまうぐらいでした。人類史上最初の原子爆弾を体験した広島市に日本国民の多くが注目しているんだなと思ひ、感心しました。中には外国人の方もたくさんいらしたので、世界も注目しているんだと思ひました。そして、平和記念式典が始まり、黙祷の後に鳴った低音の平和の鐘は、とても心に残る音でした。言葉では表現できないものが、この平和の鐘の音から聞こえてきました。その音からは今もなお苦しんでいる被爆者の人たちの怒りや悲しみなど、全てがこの音から聞こえるようでした。あの音は、忘れられませんが、僕の方が、いつまでも覚えていていられるでしょう。そして、式典の終わりが近くなったころ、子ども代表として「平和への誓い」を小学校六年生の男の子と女の子が言った、その言葉にとっても感動しました。その子達はこう言いました「未来をつくるのは人間です。喜びや悲しみを分かち合い、あきらめないで進めば、必ず夢や希望が生まれま

す」と。僕はこの瞬間に、日本だけでなく世界の未来をつくるのは、子どもである僕たちなんだと確信しました。

僕は、このすばらしい経験を学校の仲間たちに伝えていくことが大事だと思っ
ています。そして、仲間たちだけでなく一人でも多くの人に広島の思いを伝
えていきたいです。最後にこの二日間で「本当の幸せ」とは何かを考えさせら
れました。こういう良い機会を与えて下さった北名古屋市の皆様や、この二日
間で僕たちにかかわってくださった全ての方々には感謝しています。ありがとう
ございました。

これからもずっと

熊野中学校 三年 渡辺 枝里子

みなさんは想像できますか。大好きな家族や友達が、大切な学校や家が、一瞬で消えてしまうことを。一九四五年八月六日、広島にいた多くの人達がどれほどの恐怖を味わい死んでいったのかを……。それは想像を絶する、地獄のような世界だったと思います。

私がこの八月五日、六日、広島を訪れた日は、太陽が私達をまぶしく照らし、せみが元氣よく鳴いて、とても暑い日でした。

私は、平和の使者として広島を訪れるまでは、この過去の悲しい戦争について、あまり深く考えたことがありませんでした。

戦争が恐ろしく、悲惨なものだと感じたのは、広島平和記念資料館で見た多くの写真です。中でも、「頭髮が抜けた姉弟」は、特に印象に残った写真です。私は、その写真から、目が離せなくなりました。見れば見るほど悲しみと怒りがこみあげてきました。でも写真に映っている姉と弟の姉弟の方が私より何百倍もいや何千倍も悲しい目をしていたのが、私の胸がよりいっそう苦しくさせました。今まで、経験したことのない感情がたくさんあふれ出てくるようでした。

また、黒こげになった弁当箱や焼けこげた制服を見ると、私と同じくらいの年齢の人も原爆の被害にあったことを知り、自分は今、どれほど幸せな生活を送っているのかを知りました。それと同時に原爆の恐ろしさを改めて感じました。世界で初めて原子爆弾による被害を受けた広島。町はほとんど破壊され、多くの人々の生命がうばわれました。かろうじて生き残った人も、心と体に大きな痛手を受け、多くの被爆者が今なお苦しんでいます。生きる権利を奪った原爆。大切な人を失う悲しみは、いつまでも心に残り続けます。消えることはありません。罪のない人々の命が次々に奪われていく戦争。犠牲になった人々が残してくれたものは何かを考えなければいけません。

世界で唯一の被爆国である日本。まだ、原爆の恐ろしさを知らない人がたくさんいます。その恐ろしさを日本国内はもちろん、世界に伝えていかなければいけません。これからの世界が平和であり続けるために、広島で学んだ、この二日間のことを多くの人に伝え、そして本当の平和が来ることを願っています。原爆が投下された日も、せみが鳴いていたでしょうか。きっと、一生懸命鳴いていたと思います。その日に、原爆が落とされるなんて、知らなかったから。思ってもいなかったから。

私はせみの鳴き声を聞きたびに思い出すでしょう。広島平和記念資料館で見た、胸が苦しくなるようなあの悲しい、悲しい写真を……。

私は、原爆のない、本当に平和な世界を望み、行動していきたいと思います。これからもずっと。

「広島から学んだこと」

天神中学校 三年 吉田 樹生

三月十一日に、東日本大震災が発生しました。たくさんの方が命を失い、行方不明者も多数出ました。何もかも失った被災地の様子をテレビで見ても、僕は悲しみと胸苦しさを感じました。福島第一原子力発電所の事故も起こり、被災地以外の人々にも、今もなお恐怖と不安を与え続けています。このような時に、僕たちは八月五日、六日に平和の使者として、広島を訪れました。

今から六十六年前の昭和二十年八月六日、一発の原子爆弾が広島に投下されました。長さ約三メートル、重さ約四トン。強烈な熱線と爆風は、爆心地から二キロ以内にあつたほとんどの建物を破壊し、約十四万人の尊い命が失われました。今でも多くの被爆者が、ガンや白血病、ケロイドなどで苦しんでいるそうです。

原爆ドームは、原子爆弾の惨劇を示すシンボルです。一瞬のうちに広島を焼け野原にした原子爆弾から焼け残った数少ない被爆建造物として、海外からも多くの人々が訪れているそうです。鉄骨がむき出しになっていて、外壁はボロボロ。僕は、原子爆弾のすさまじい破壊力に、恐怖を感じました。

平和記念資料館の展示物の中で一番印象に残っているのは、原爆の被災者の状況を示すジオラマです。かろうじて生き残った人々が、焼け焦げて血みどろになった衣服をわずかに身にまとい、瓦礫の街を逃げ惑う姿が表されています。六十六年前の広島の前は、僕がその日に見た街とはかけ離れており、心が痛みました。平和の使者として、この展示物を目に焼きつけ、それを伝えることが僕たちの使命だと感じました。

二日目には、平和記念式典に参列しました。八時十五分に鐘が鳴り響き、一分間の黙とうをしました。黙とうの間に、前日に見学した残酷な出来事が頭の中を駆け巡りました。広島市長が平和宣言の中で話されたように、私たちが、すべての被爆者からその体験や平和への思いをしっかりと学び、次世代に、そして世界に伝えていかなければなりません。学んだことを多くの人々に伝えることが、平和の使者としての使命であるとさらに自覚しました。

過去に戻ることも、過去を変えることもできませんが、未来は変えることができます。テロや紛争が続くこの世界を生きる一人の人間として、一日も早い核兵器廃絶と世界恒久平和を願い、そのために僕たちが出来ることを考え、実行していきたいと思えます。

最後に平和の使者として、二日間多くのことを学ばせて頂き、とても良い経験となりました。感謝しています。本当にありがとうございました。